

氏 名（本籍）	田 中 マリア（山 梨 県） <small>た なか まりあ</small>		
学 位 の 種 類	博 士（教 育 学）		
学 位 記 番 号	博 甲 第 4142 号		
学位授与年月日	平成 18 年 4 月 30 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科		
学 位 論 文 題 目	ルソーの教育思想に関する研究 －宗教を基盤に据えた人格形成論に着目して－		
主 査	筑波大学教授	博士（教育学）	福 田 弘
副 査	筑波大学教授	博士（教育学）	田 中 統 治
副 査	筑波大学教授	博士（教育学）	塚 田 泰 彦
副 査	筑波大学教授	博士（教育学）	山 内 芳 文

論 文 の 内 容 の 要 旨

1. 目的

本論文は、J. J. ルソーの宗教関連の言説に焦点を当て、彼の教育思想の新たな角度からの再評価を行うことを目的としている。より具体的にいえば、『エミール』においてルソーが育成しようとした「有徳な人間」像の内実を再検討し、『エミール』理論の新たな可能性を示すことを通して、ルソーの教育思想を再評価しようとするものである。

従来の教育学関係の先行研究においては、概して、ルソーの宗教観は理神論的なものとされたり、彼の宗教観と教育思想との関連が看過されたりしてきた。それは、ルソーが育成を目指した「有徳な人間」を「ナショナリスト的な人間」、「理性的な人間」と捉える点に端的に表れている。また、『エミール』第4編中の「サヴォワ人助任司祭の信仰告白」も、啓示宗教とは異なる理神論的な宗教観に立つものと解釈されてきた。こうした先行研究の問題点をふまえ、本論文は、ルソーの宗教的言説に焦点を合わせて検討し、特に『エミール』における「信仰告白」の本質と意義とを再検討し、ルソーにおける「有徳な人間」像を宗教観との関連で明らかにすることを研究課題としている。

2. 対象と方法

第一は、ルソーの幼少期から壮年期にいたる宗教観の形成過程を伝記考証的に追求すること、第二は、多岐にわたるジャンルのルソーの著作の分析をもとにその宗教観の特質を明らかにすること、第三は、『エミール』第4編に組み込まれている「信仰告白」に関する多面的、多角的な考証を中心に、ルソーにおける「有徳な人間」の特質を分析することである。

本論文では、小説、学術論文、宗教的論争関連論文等、多岐にわたるルソーの著作及び同時代の関連諸文献の解説を中心とする文献研究の手法を用いている。

3. 結果

第一の課題については、多くの文献を用いた伝記的手法によって、幼少年期、青年期、壮年期に区分して、宗教観の形成過程を検討した。

第二の課題については、ルソーの様々な著作の検討を通じて、その宗教観の特質を明らかにした。

第三の課題については、そのようにして明らかにしたルソーの宗教観をふまえて、ルソーの教育思想、とりわけ『エミール』における「有徳な人間」像の特質を明らかにした。

4. 考察

第一の課題については、まず幼少年期について、彼の面倒を見た叔母たちが「敬虔主義的な信仰家」であったこと、養育において「賛美歌」などの歌を多用したことなどが、ルソーの宗教的情操及び宗教観の基礎を築いたことを確認した。青年期については、ルソーの精神的危機に際して援助したゲーム神父が「信仰告白」における司祭のモデルであり、ルソー自身に宗教的感化を与えたこと、ルソーのパトロンであったヴァラン夫人が敬虔主義的信仰の持ち主で、ルソーに多大な影響を与えたこと、などの事実の持つ意義を確認した。また、壮年期については、啓蒙合理主義者たちから強力な影響を受けつつも、主として宗教観の違いを理由に彼らと袂を分かったこと、『エミール』に組み込んだ「信仰告白」そのものがルソー自身の真剣な宗教的探求の成果であること、などを明らかにした。(第1章)

第二の課題については、ルソーの様々な著作の検討を通じて、その宗教観の特質が以下の諸点にあることを確認した。①ルソーは「神の摂理の正当性」を確信していること、②「霊魂の不滅」と「魂の救済」を支持していること、③「信仰に裏づけられた道徳」を支持していること、④「感情の宗教」を信じ、「人格神」「イエス・キリスト」を肯定し、自らを「イエス・キリストの弟子としてのキリスト者」と認識していること、等である。(第2章)

第三の課題については、上記のような特質を持つ宗教観をふまえて、ルソーの教育思想、とりわけ『エミール』における「有徳な人間」像について検討を加え、以下のような事実を確認している。①ルソーの教育思想において宗教と道徳は不可分の関係にあること、②「信仰告白」における宗教は、ルソー自身の宗教と同じく、福音書とイエスの精神にのっとった「福音の宗教」であること、③ルソーの宗教教育論における方法論は、「不敬虔ではない理性」、「福音書の精神と究極的には一致するような理性」を重視したルソーの必然的結果であること、④エミールの「敬虔さ」は第5編でソフィーとの対比において描かれていること、⑤『エミール』はエミールとソフィーが「結婚」するところで終わっており、そこに「結婚」を極めて「神聖」なものとして捉えるルソーのキリスト教的な倫理観が現れていること、⑥「福音の宗教」を保持するエミールは、イエスをモデルとしたキリスト教的愛の実践を心がけて生きることになること、したがって、ルソーにおける「有徳な人間」は、極めて「宗教的な人間」であり、しかもある種の「普遍性」を有する宗教に立つこと、そして「キリスト教的愛」に基礎付けられた道徳を実践することができる人物、多様な価値が混在する時代にあって、「無神論」にも「狂信」にも陥らず、「不寛容」にも「無関心」にも陥らない、そして、明確な自己の意志をもち、しっかりと判断を下せる人物であること、等である。(第3章)

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、綿密な先行研究の批判的検討をもとに、従来の教育学研究において軽視されがちであったルソーの宗教的言説に注目し、これを多くの著作を丹念に読み解くことを通して構造付け、ルソーの教育思想における宗教的基盤の本質と意義を明らかにしている。その上で、『エミール』においてルソーが目指した「有徳な人間」像の特質を宗教的基盤に立つものとして解明し、『エミール』を宗教を基盤に捉えた人格形成論として読むという、ルソーの教育思想の新たな解釈の可能性と展望を示しているが、この点で、本論文は高く評価される。先行研究の検討は適切かつ着実であり、論文における着眼点、課題設定及びその論究方法にオリジナリティーが認められる。また、特にルソーの宗教教育の方法論に関する考証は斬新かつ優れたもので、学界でも高く評価されている。

よって、著者は博士(教育学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。